

雅言成彙

上卷

392
1

ホ 2
392
1



ホ 2
392
1-2

ホ 2
392
1

東京
學校
圖書

392
1

雅言成法上卷目錄

標第一	假畧	十八丁
標第二	非畧	二十二丁
標第三	訛畧	四十一丁
標第四	相通	四十七丁
標第五	訛通	五十三丁
標第六	轉換	五十七丁
標第七	清濁轉換	五十九丁

雅言成法上卷

目一

雅言成法上卷

一	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
一	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
二	非	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
三	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
四	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
五	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
六	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
七	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
八	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
九	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
十	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
十一	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
十二	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
十三	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
十四	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
十五	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
十六	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
十七	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
十八	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
十九	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
二十	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
二十一	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
二十二	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
二十三	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
二十四	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
二十五	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
二十六	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
二十七	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
二十八	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
二十九	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
三十	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
三十一	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
三十二	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
三十三	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
三十四	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
三十五	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
三十六	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
三十七	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
三十八	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
三十九	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
四十	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
四十一	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
四十二	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
四十三	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
四十四	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
四十五	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
四十六	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
四十七	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
四十八	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
四十九	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
五十	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
五十一	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
五十二	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
五十三	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
五十四	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
五十五	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
五十六	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
五十七	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
五十八	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
五十九	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
六十	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
六十一	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
六十二	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
六十三	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
六十四	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
六十五	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
六十六	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
六十七	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
六十八	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
六十九	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
七十	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
七十一	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
七十二	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
七十三	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
七十四	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
七十五	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
七十六	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
七十七	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
七十八	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
七十九	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
八十	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
八十一	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
八十二	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
八十三	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
八十四	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
八十五	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
八十六	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
八十七	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
八十八	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
八十九	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
九十	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
九十一	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
九十二	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
九十三	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
九十四	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
九十五	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
九十六	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
九十七	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
九十八	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
九十九	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
一百	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓

總論 凡そ古言の志のいふもとに義を解ことなることは中昔
 の識者等も事ふふれていをりせしことなれど其はあ
 だ大らとみ見むがはて委しく物せしことはをさくたし
 たりをこに泰平となりて華夷の書籍に涉獵する人や多
 くなりしよつきて古言の志のいふもとのことるを事と
 して解ものせしこといふく少うらげ志のれども古言
 の意を解ハ隠語を釋と同トさまよ意得て物せる故よ今
 よりして見ればいとをさくして論ふよ足るもれさら
 なるし其中よ多あくあされりとおほしきも百よ一は

なきよしもあらねど、多岐やみの夜のつぶてよて、多のむ
なきことハ一つもなかりたり。いふよと云ふ、まべて天曆
といひしより、ヲチツカタ以往の古書等も、カナツカヒ假字用格いと正しくして、
イ井エエオヲの多岐ひ、或はヂジズヅヂジズヅの分差まで一つもあ
らみことなるを、それ後やうくみだれて、アワヤ三行
の假字を混へ、チジズヅチジズヅの濁音を亂して、ヤホトセヨカメ數百年來善く此
よ心をつけて、辨へ知る人なるを、シ故なり。志うるを
さきよ難波の契冲法師出て、皇朝の古は書をひろく見、あ
まねく考へて、古の人れこと、ヒひの正しを、ツつきで、
其をうつし傳へし假字も、其がまに、サ差ふことなる、ヒ謬

つことなる、正しを、シしを始めて考へ出して、四方よ
示し諭せるによりて、古の假字再び世も明となりぬるハ、
まぐれてめでとく、ニ二なき功よぞありける。さておひを、
ひよ古學の道いよく開けて、古言の假字を、ヒひのまぢハ
明ありぬるものあら、ホほ雅言ハ法格を曉らばして、
岡部氏など、ヒひと、ラらよ反切畧轉のさぶもて、いよくま
まをむつうくこと、ラらへて、古言を解こと、ハハ格
を辨へぬさきの眼より見、ハハむよハ、キき一方の説どもよ
くらべてハ、コこよなくまぐれて、古のまことよ立、ハハへ、
こちをることなめれど、舊來のまに五十音のヲを阿

行ツラに屬ねオを和行ツラに屬ねるより物せる故也。快ツラらざることも多く。且ツラ雅言ツラは規格あることを露ツラきことめざしツラるらよく見るときハ十ツラよりして七八ツラハ私説ツラしてまことのなりに遠ツラるツラハあツラぬことなりしを本居氏出ツラてなほ深く考へひろくあづねてオを阿行ツラにヲを和行ツラに改めて字音假字用格を著ツラしてその然るべきゆゑよしを委ツラくことしれりまことよツラこツラ此所屬ツラの錯置ツラを改てより古言を解ツラはツラさらよツラて字音を辨ツラふるさツラべいさツラるツラあがふことツラなくツラなりてさツラきに識者ツラどもツラのくツラきツラはツラ考へて物せることツラもツラハみツラる強ツラる説のみツラよツラして今ハ餘蘊ツラあ

きことになりぬるハ又ツラなきいツラとづきツラならツラばや志ツラうれどツラもツラをツラきツラことツラハ古言を解ツラよツラくはツラき規格あることまで考へいツラらツラざツラしツラハツラるツラほあツラぬことツラなり本居氏ツラハ生涯ツラこのことツラに考へ至ツラらツラばツラして止ツラぬべき人ツラハあツラらツラざるをツラくツラきツラの理ツラハ心を用ツラひツラとツラしツラによりてこのツラ一ツラをツラちを深ツラく考ツラるいツラとまツラなツラうツラしツラが故ツラなるべツラしその規格あることまでを考へいツラらツラざツラしツラが故ツラに盡ツラざることあり其ツラハいツラのなることを云ツラぞと云ツラにまツラづ畧言ツラのさツラぶをもツラて古言をツラときことツラとツラるツラ舊慣ツラのれツラぞツラらツラざツラしツラこツラまツラをツラとツラめツラれ難ツラとぞ云ツラべきそツラもツラく畧言と云ツラハかの天竺國の語を漢國よ

て畧きて唱ること多し。はるはまづ梵語の泥轉ディバを漢語よ
天と譯し。託史クシマ麼を地と譯し。娜羅ナラを人と譯し。或ハ佛陀ブツを
淨覺と譯し。菩提薩埵ボダイサツタを大道と譯して。彼方の書どもに書
るときハ。ことに云べきこともなきを佛と云ハいゝあ
ることよて云そと云よ。天竺國よて佛陀と云を。漢國よて直
直に譯言を用ひてハ。中々にまぎるゝことあるところよ
を。陀を畧き除て佛とのみ志るゝ。菩薩とハいゝあること
よて云そと云よ。天竺國よて菩提薩埵と云を。漢國よて直
に譯言を用ひてハ。中々にまぎるゝことあるところよハ。
提埵を畧き却て菩薩とのみ志るせるよて。この類いと多

し。これいとゆる畧言あり。もべて梵語ハ長くしきが多
き故よ。其をみながら漢籍よ志るさむことを。つづらそし
く思ひて。ことさらに畧けるよて。理のあることなり。皇朝
の上代よ浪速ナニハヤと云しを。後よ那爾波ナニハと呼。泊瀨ハツセを今世よ波
勢ヒと唱る類。これ浪を難と云ハ。三を同韻のニよ速畧ハヤよて
波ハとなり。泊畧ハツよて波ハと志ること。皆自然の訛畧よて。心
として畧けるもれよあらざれば。かの佛陀を畧きて佛と
云る類とハ。いとくさまかをれり。書記よ。為浪速國亦曰浪
華ハナ今謂難波ナニハトヨコヤヒ訛ミヤルと志るされて。其註に訛此云與許奈磨盧と
あり。訛ミヤルとをいひまがへのことあり。今世の人ハ心ならバ

浪速國今謂難波通畧也。あるハ今をこゝ委しく云ときハ。今謂難波曰浪為難韻通也。曰速為波下畧也。などやうよ志るすべきことなるよ。はるさまにいせれしところハ一つもなくして。其後もかくさまの處ハ。號其地曰某。今謂某訛也。とやうにことごとく志るされし也。これ心として畧けるよ。をあらば。自然の訛畧なるがゆゑなり。皇朝の言ハ。神の御代より神のいひをめ給ひし言を。後々よいひ傳へ來しこととされば。ことさらに人心として。省畧のさぶを加へむ。して通ゆまじく。或ハ畧き除むして。いづづらむしき言などを。あるかゝと神のいひをめ給ふべき理や。あるべき。

だ上古中古近古と風俗のうつろひ來りにつきて。人の言語も自然は類れ訛せしることもあるが。譯註なくしてハ。通えがさきこともあるのみハ。止事を得ぬことなり。志られむ。今世は波勢と云を。古昔の波都勢の訛を畧られるも。はるりといふべし。畧きていへるも。はるりといふべし。らば。されむ古言を解すべし。多やむく畧言のさぶをほど。こをべきよ。あらざれども。かれ漢籍よ。梵語を畧き言るな。と云こと。の多きになれし目うつりに。皇朝の古言を。も其と一志なきに心得て。解來れること。の多き。自然人の心よ。志まつきて。近來古學の道大く開けて。心ある人。

をそのあしきをばさととりて、儒佛の意を清離れよと云こ
とを常談イヒガキよとることをなれど、この畧言リョウゴン此さをまぬれ
とる人のひとりたよなうを余オノがはじめてこの處よ
心つきてより、舊慣の畧言リョウゴン此さをとるれて、古言を解キ
ころ見るに、一とすて規則キツルよかなとざることをし、多ま
今世よ、假字つうひの事をこまらにさととり得ると思ひ
て、それと思ひゆるせる人あり、其のかのアアロロヤヤ三行の
假字を正し、チチジジズズの濁音を正さぬめ、或は詞の清濁セイダク氏
爾乎波ニルハの結ムスなどを取らづして物をるむりのことハを
さをさきとえぬごとくふれるハ、さはいへど、まことにお

ひをがひは古學の開けちあらはてめでとき世のさあ
とそいひつべき志られども、さる人々れ古言をときこと
するよ、いとりてハ、畧通リョウツウ或ハ舒約シュヤクのさを常とることあ
るよ、いなる理はて畧通リョウツウ、いられる謂イハして舒シュみ約ヤクに
せるを、といへる人をいまどきいひ、さるハ、いられるゆゑ
そといふよ、皇朝の古書をあきらめ得るとおもふも、な
は古言を、我物よしてとらまうぬふことを得て、或ハ
韻鏡ウツキョウ或ハ悉曇シツタンなどよもつきて、文字ハ反切音韻の四聲
まゝ開合喉舌牙齒唇の音の、おこれるを、おめれことあど
よりあどりそめて、やうく其を心よ得るより、皇朝の古を

も其をもて推究めむと云はふるくせの。此ぞこらぬゆゑ
なり。文字も後よ皇朝よ。悉曇ハ又後よ來。一
も此なきバ。いうで。異國の理もて。神代の言靈をバ
推きをむべき。いとをこれるわざならむや。そも古言を
かの韻鏡悉曇等の旨よ。中よ。かなふこともあれば。その
うれふのぎりハ。彼をもて此を推て。志る。理なれば。そ
の志らる。かぎりをまぎて。さとらるべきまづのなけれ
バ。ほひよ言靈の妙あるおくらを。ば多むら。止より他
なきことなり。うれむべきことのきをみと云べし。こ
ハあざ。國の言語ハ。いやくま。あくして。虫鳥のさへ

はりなく聲よひと。たれバ。まが神代よりの言多ま。れみ
やび聲をしも。彼とひと。なみよいふべき理や。ある。ゆ
き。かへ。も。か。ら。い。さ。き。ことなり。し。華夷の言語
の尊き卑きこと。りハ。余が。考。出。せ。る。非。む。は
やく先輩の言つくせることなれば。今こ。新。しくいふ。ゆ
きよ。あらざ。め。れ。ど。その人この古言をとくよ。い。り。て。畧
通。或ハ舒約のさごのみいひて。とつくよ。書。の。とき。さまよ。
實ハいさく。ふ。こと。の。なきハ。舊。漆。る。く。せ。の。な。か。の
ぞ。こ。ら。ぬ。ゆ。ゑ。あ。ら。む。や。さらバ。そ。れ。朝。開。を。阿。佐。氣。借。廬。を
可。利。保。と。云。る。お。ご。と。き。ハ。畧。言。よ。あ。ら。む。や。と。云。よ。こ。れ。あ

彼の加とハ音通ふよりて同言なりといはば、彼此を別
多むよしく又出入のツと入のルとハ韻通ふよりて同
言なりとせば出入を異へむべきならし、さればゆゑなく
て、反切畧通のさだを用ふべきよあらばと志れ、かむより
のこことハ難波津とどる童部とて、一の門をたりて物いふ
なるよ、さる謂も心つらむして、一の門をたりて物いふ
きはの然るべき理をいたぬるハ、いふよそや、
物のべきことあり、さらば反切畧通のさだをきよくされ
れて、古言を解べきかとも云べけれど、然よハあらば、元然
るべき理よもとづきて、さてのちよ、舒でとるよ、約でと
るよ、或ハ省らり通ひなど、ある趣を、さだむべきこと
なり、安母理ハ天降の約、久奴知ハ國內の約、見良久ハ見
流の舒、戀良久ハ戀流の舒、多能母ハ田面の省、美知能

久ハ道奥の省、許保之久ハ戀之久の通、多杼伎ハ手著の
通、許能波ハ木葉の轉、佐可豆伎ハ酒杯の轉、ちりなど云類
をも、すべていふべからば、古言を解道をふせぐ
べき、さて、此等の類を、ばをこむくいひても、元來然るべき
格の法を、それきざるが故、末代動らぬことぞかし、
然るべき理ありて、畧通ハ舒約する謂ハ、
な本條よくむくこと、むらむ、
トめ緊要とある所、心をつくべきことなるよ、
よ志ありふこと、のよ、をこととるを、本意と心得、古學を
る人の、むざのやり、と思ひて、まづ阿米と云ハ、
とれるを、葦、
斯を省き、
萌を切て、
いへるもの、
或ハ青

所見と云ことよて。青の袁を省き。所見を切ていへるもの
ならむといへる類多し。古事記傳云。天ハ葦萌。或ハ青所見
の省。約云。るまらむと云。そ
れよりをちつあとの學者の天と云ハるまの約り。これの
約りまどいへる類ハ。ことよをさなれバ。論ふまでもな
し。其ハ木芽と云も米ハ萌の約。人目と云も米ハ所見の
約。なることハ。はらよ動ぬことよて。反切の格よそれ
まぬことなれど。葦の斯を省き。青の袁を省けりと云こと。
いとゆる畧例の則よられひがと。其ハいふにまれ。天地
の割れし時より。神のいひそめ給ひしことなれば。阿米ハ。
今日の前よ見さくるところの天よさかひハななれバ。い
ゝなるよしよて。ちろ號そめしと云ことまでハ。多とらば

てもありぬべきことなり。はらいへど。古言のゆゑよしを
解こと日ることハ。古書よむ人のならひなれば。あされり
やああらどや。考見ぞして黙居べきよあらむとも云むら。
はらバ。阿米ハ。葦萌の謂。まれ。青所見の義。まれ。その葦
といひ。青といふことハ。又いられるよしよて。ちろ名づけ
そめするそと問。バ。何とる答へむ。又それいをゆる葦とい
ふ名。青といふ號も。天地の割れざりし前より。その稱備を
りてありしと云こととも志るべうらねバ。いづれ先。いづれ
後よ出来なむと云ことおほつあるし。又深く考へて。万代
不易ととのむべき説を思ひ得とりとて。天ハ。天地ハ。地よ

多かひいなるればさのみ人間に補益あることよもあら
むはまばこれらのうへに強て心を費さむハ無益のいと
づきといふべきものなりさればこれらのことをさだす
るハ緊要とあることよあらば緊要とあること云ハ舒
とさるよも阿礼約とさるよもあれその志あいへるもと
の義を知むしてハ用ひさる末の詳ならざると又同言よ
ても活動のさまによりてその意は異なることあればい
づれ古人の法あへるやうをよく明らむべきことれり
まづこゝよりひまねびの徒ありて古言よ和藝母とある
ハいなるものをさして云と問むよ吾妹と云ことれ

るを我伊を約て和藝母と云るも此なり又古言よ阿理曾
とあるハいなる處をさして云と問む荒磯と云と
とるるを良伊を約て阿理曾と云るものなりと解教へむ
おごときハ反切のさざもていを得あらぬことよて
緊要とあることなれば幼學も悟りやま又格よもとら
ねハ識者のそしをもちけぬことなるを可須美とハい
られることよて云と問むよ赤漆の畧言なりと諭さ
むよ幼學の耳よハげよと驚くべきことよあらむ霞の
義を日邊赤氣也と註せる志られども畧例の格よも多
よもよく應ひとれなり志られども畧例の格よも多
のハ阿行の音の語中よて假よ自省うる格よあらざら
ハ勿論なり海を宇鳥を等とのみ云類よもあらざれば

る。又今目前に見るところの可須美も、さほ多ぶひくれ
む。識者の中よハ中よ信用ぬ人もあるべし。さて其次よ
吉野よ在を吉野那流と云。常磐よ有を常磐那流といへる
類ハ爾阿の切那なる故よ。約めて云るよて。其ハ俱よ短よ
急く云て宜しき語勢の處よ。必云ことよて。反切の格ハ同
じことれがら。用へるやうよ。各いさよ。別あることなり。
吉野那流ハ在于吉野と云意。常磐那流ハ常磐よてあると
云義。俗よ常磐でをるとよて。此類許多あれど。この格をを
いふよあされり。れよ。是よ。るよ。いよ。ふよ。あよ。さよ。れよ。りよ。
緊要とある所よ心をつくさて又舒いふ
よ三種の格あり。まづその云をとり出ていさぶ。隠と云こ

とを舒さるよ。加行よ活動をと。佐行よ活動をと。波行よ活
動をとの差異あり。その加行よ活動をと云ハ。加久良久。佐
行よえとららぬと云ハ。加久良須。波行よはとらかきと云
ハ。加久良布と云類なり。良久も良須も良布も。流よ約るが
故よ。いづれよえとらかきても。おつる處ハ同やことあり。
とやをく一とよとよ。意得むハ。いとわろそああることあ
也。加久良久ハ。隠る。事ガ。或ハ。隠る。やうハ。おと云意。加
久良須ハ。隠り給ふと云意。加久良布ハ。多かりそめよ。隠
る。事あらば。長く緩よ引つゞきて。絶ず物せる意味ある
處よ。いふ言と志るべし。本條よ出まところの
例を見て。委考べし。前よも云る

ごとく古學の道開けてより古言を解トことトるトこと。いよ
いよまほしくさうしくありてきううこの註者どもの物せ
るよくらべ見ればこよあくをぐれてよろしくなれるよ。
猶これ反切の格をくましくさだせざりし故よ。此等の
差異あることを委トくときあひせる人をいまごきあは
ざるハ古書をひとまぢよ讀味ふる人もあほ學の力トとも
しくしてそれ目よ見え心よ思トるトあぎりよとままり
てつひよその奥をうかぶひ知ことかくして生涯を過トす。
或ハ華夷をいさげ書籍よひろく目とりあまねく考へて
物なる輩もひさぶるよとが古をのみ味へをるいとまれ

くしてやみ或ハかの韻鏡悉曇等より入をめて其を規範カギ
として。とが古をうかぶともがらもあほあがし國の理
よのみほごされてこれ舒いよ詞よ三種の差異あること
までを辨へざりしあゆ急よ古書を見るよも自ツ文つくり
歌よむよもとまればおろそああるまぢありて言とま
れくましく妙なる謂をいひいへどもそのまことよく
ましく妙よして又あく尊きをぢハ實よいづくよあり
ともさとりあり得ばして止ぬるもれとたをえりあく
いさばあほあ規格をかまへてとよかくこちとく論を
むハ漢籍カラのうへならバこそあらめ皇朝の古は何事もあ

だ大らうあましくまゆく。人の言語も後世の如く。理をきか
めて。制度を多てしることしあらねば。今日づらはしくま
うけて論をむか。中て古もとりて平穩あらば。反切も
も種々差異ハあれど。彼ハ彼。此ハ此と古書もある。ま
ま。自然人の耳も分れて聞ゆることあれば。必人の解説
を待でもある。言の表はあらそいていさげても。心の
底も別れて通ゆるハ。是を言靈の妙ある道よそあるべき。
と思ふ人も中てもあるべし。其ハなほ古學も熟くあらざ
るか所以なり。上古も生れて。その時親親文雅もあらへ
らむよ。言靈の妙處も。必人の解説よよらげても知るべ

きなれど。數百年來埋れしこと。近世も至りて漸く
よ開けしことなれば。然らば。今幸も先輩等のおひそめ
ひよ。發明あるなり。道も多よりて。なほそのうへよ志るべ
をまうけて。準繩をほどこして。委く奥義をとづねべきこ
とぞ。古ハ章法句法より語辭よいとるまで。一言と
て。規格をとて。物をるよ合と云ことかし。是をまこと
の言靈の妙なるをぢよて。そのまことの言靈の妙あるを
ぢハ。たのづめらる規則をあらりてあることあれば。今
かりも規則を多てたきて。こゝく其を匡たくことそ
ろし。いでその規格よくしからざるによりて。古意を委

くうかひ盡さばることのよきを、一云べし。總て古書を
よむよよく聞えと可と思ふことも、古の人の意よありて。
古の規格よ引あて、うのぶふよ、きをめてきこえぬこ
とのまゝあるものを、それハ今時の打とけ言のうへ
ならばこそあらめ。古人の言語の今人の耳よきこえし
とて、古人のきこゆまなきことのあるを、何とせむま
づ萬葉開卷の大御歌よ、家吉閑名告沙根とある。この家吉
閑を、岡部氏万葉考よ、家告閑と改めて、家能良閑と訓とる
ハ、動うぬ説なりと本居氏も賞うり。まことよ家吉閑を、舊
本のまゝにとをけたきて、家將聞イヘキカムといふこととして、大

抵ハ聞ゆることなれど、さてハ俗意よありて、拙けきば、こ
れいゝゆる今の人の耳よ、聞ゆまども、古人よ聞えばと
云ものあり。告閑ノラヘとをるときハ、吉閑キカムといふよくらべ見れ
ば、とよれくをぐれてめでときことなれば、古學開けし補
益とは云べし。志あれども、それもあらず、件よいへるとこ
ろの規則よ引あて、考るときハ、未盡ざるところあり。い
ふにと云よ、名告沙根ナノラヘの沙ハ、勢セの轉れるよて、名告勢ナノラヘとの
とまふよ根ネの辭ジは、そりたるものあり。さてその根ネの辭ジ
のそふよ引れて、勢セを沙サよ轉テして沙根サネと云ること。古言の
格皆志あり。勢セを沙サよ轉テきこと、さてこの根ネハ、希望辭キボヒよて、
の理ハ本條よ委ツ云。

御二句を括りて詔へるよてくはしく云ときハ家告沙根
 名告沙根とあるべきを。これ一の根よもとせあるへるよ
 て。や、後なるら後撰集よ。松もひきまのなもつまじとあ
 るハ。松も引ば。若菜も採むと云ことなるを。一の不れ言よ
 帶させとるよ同トことあり。されバ家告閑と波行よ活動
 し。名告勢と佐行の言よとさらありてハ。家のことハ。名の
 ことハ。あちまち言の縁絶る故よ。一の根ハ辭よて總括り
 賜へりといひつと。さて又告ハ。かくさまの處ハ。能良佐
 祢能良斯能良須能良勢ふど。佐行よ活用く格よて。即三卷
 よ。言名者告世ともありて。能良波祢能良比能良布能良閑

と波行よ活用べき處ならねバ。告閑とハ。詔ふまじく決
 て告勢とあるべきことあり。さて彼説を去ばらくあをけ
 ふべし。告閑の良閑ハ。私の舒也。名告沙根ハ。沙根ハ。勢の約
 ば。おつるところハ。家告礼。名告礼といふことよ。舒てのよ
 まへち御歌詞なりとをるときハ。かの雅言の法格をとど
 らぬ耳よハ。申すや。ちをちよ。か。の。雅。言。の。法。格。を。と。ど
 ることよ。ならむ。も。その説のどとく。家告礼。名告礼と云
 ことよ。波行の言よとらあり。ハ。良勢と佐行の言よと
 良閑と波行の言よとまへり。とをるときハ。家と名とのくさ
 絶をつることなるよ。同トつらなることよ。引つがけて。志
 みのよ。まをむこと。古よ。例も。格。さてその告勢ハ。乃礼の舒
 も。さらよ。あること。なきを。や。さてその告勢ハ。乃礼の舒
 ず。とるよて。志の舒てのよ。まへり。ハ。即敬ひて告賜へと云
 ほと。の御意なること。その上よ。菜採須とのよ。まへり。ハ。菜

採賜ふと云布との御意なるよ照味ふべし
切採バ乃礼とのさまふ同トとのみ云て止も麻湏ハ上よ
茶切バ採あるよさらまふ應同トとのみ云て止も麻湏ハ上よ
の耳法則やさらあまきこゆることなり然るべき理なく
格の無益の舒約いさごまりあきることなり然るべき理なく
歌詞處を言の數けさひひ或ハ餘さる處を約めたり詞の足
とるなりとおもふ今一六言をさる處を約めたり詞の足
の歌句三言四言或ハ六言七言をさる處を約めたり詞の足
るまじき理なるやことと上は活用すいふことと敬ひて
又名告沙根の勢とつまれば同カ告勢と云よ良勢
ハ礼切バ畢竟ハ草を刈勢と云ふ意なりといふも
バ礼切バ畢竟ハ草を刈勢と云ふ意なりといふも
といふ礼切バ畢竟ハ草を刈勢と云ふ意なりといふも

こゆること待たれども相見社根まといへる禰の年ま
年と君乎待たれども相見社根まといへる禰の年ま
いと根と來年とつる人むむりこれら禰ハ希望
根のいと來年とつる人むむりこれら禰ハ希望
むのいと來年とつる人むむりこれら禰ハ希望
ふ意のいと來年とつる人むむりこれら禰ハ希望
くこの根の辭を除ていふときハ名告沙ハ上云ら
まへ名告とまへと云御意なるよ根の希望辭をそへて
りさて家名を告とまへと云御意なるよ根の希望辭をそへて
採賜ふと云意なるよ名告とまへと云御意なるよ根の希望辭をそへて
ふ女よいと云意なるよ名告とまへと云御意なるよ根の希望辭をそへて
意なりとて右の意なるよ名告とまへと云御意なるよ根の希望辭をそへて
やうまのさまひて告とまへと云御意なるよ根の希望辭をそへて
さハまのさまひて告とまへと云御意なるよ根の希望辭をそへて
告勢ハ女と對ひてさあへる切と云御意なるよ根の希望辭をそへて
は御身の女と對ひてさあへる切と云御意なるよ根の希望辭をそへて
るれバ告多るをめと云御意なるよ根の希望辭をそへて
ろきことたりをめと云御意なるよ根の希望辭をそへて

こそ、作者の本意もとほりてよむかひあることなるよか
 の岡部氏が万葉考よふにその詞の舒約のさだめりてか
 止ぬるよゆねて世の古學者ども然るべき理よてか
 くさまよのべとさるよ約めなどしていへるものなりと
 いふことまでとどらずてつひよよみ人の本意もほり
 かくれてあらざりしはうれとかりけることいもあ
 し、
 藤原雅澄撰

雅言成法上卷

藤原雅澄撰

假畧 阿行の音の語中ニ在るとき自省ると阿行の音此通よ
 て自省るとを今姑假畧と云其證左ニ舉ること

阿行の音此語中ニ在るとき自省る例

連語の上此言の尾の餘韻のアイウオニ含ませて下の言
 の首の自省る例を此ニ舉るとへバ初條ニ出せるあさけ
 ハあさあけなれどさの韻ニあ此言を含みとる故ニあハ
 自省るるがごとし允ていづれも此例を以意得べし

○あさ^朝□^アけ ○あさ^朝な□^アさな ○な^露が□^アめ ○わ^若の□^アゆ ○や
 ま^藍□^アる ○か^藍ら□^アる ○さ^青□^アを以上阿の音此自省るる例

とのあるハ、いりみどりよし。古よくとららば、おろそなるがゆゑなり。なわこのこと下よ云を見べし。以上於の音ハ自省アところ例なり。

上、件の例どもいと多くあれど、わづらわしくことごとく、とら舉げ、自餘ハこれよ准へて意得べし。

阿行の音ハ通よて言の自省る例

多とへむ初條よ出せる。わがへハ、わがいへの省あり。よて、かの餘韻ハあよて、わがあへとなるを、いハそのあよ通ひて自省アところなり。凡そ阿行の音をバ、此よも彼よも互よ通よして省ること、皆此例よ意得べし。

- わが^吾へ^家○い^妹も^家が^家へ^宿○ぬ^上る^馬が^馬へ^然○あ^吾が^馬ま^然○志

あ^アも^思ふ○か^片と^アも^思ひ○わ^吾が^思も^思ふ○わ^吾ハ^思も^思ふ○あ^何

ど^アも^思ふ○あ^吾が^面も^面て^我母^卷底^{廿六}と^下よ^阿○あ^足と^ア○ふ^船

な^アで^出○わ^吾れ^吾を^出や^出ぬ^出ぬ^古事^記と^有り^和礼^波夜^夜○以上阿の音

の自省アところ例なり。その省アところ阿の音ハ、いづれも伊の通なり。下の伊字、衣於みれ、これよ同じ。

- み^馬ま^戀○こ^思ひ^思も^思ふ○な^並み^思よ^思も^思ま^浪い^音○な^浪み^音と
- ぬ^脱き^棄つ^飯る○い^飯ひ^飯よ^飯ゑ^飯て^書紀^紀以上伊の音ハ自省アところ例なり。

- ふる^古へ^家これ字の音ハ自省アところ例なり。
- い^家へ^思も^思ふ○さ^細い^石れ^乾○か^飯れ^飯ひ^離○は^磯な^磯れ^磯○そ^磯

せらしめ 反置 きたば 思十四馬伎十六那婆とあり 以上衣の音此自省
 せとる例あり。

○いも 妹許 ありと 云へ ば ○ゆくと 云ふ 九て行とふ來とふ有
 の とふ 皆此定よ意得べし又行ちふ來ちふなどいふち
 異なりと知ら言の原 ○もの 物 不云 云 びと 旅 へど ○ほの 穂
 へ ○やまの 山 へ ○ぬの 野 へ ○まぎの 龍 へ ○ふなの 船
 へ ○みゆの 御湯 へ ○かはの 河 へ ○なみの 浪 へ ○くさの 草
 へ ○ひざの 膝 へ ○さかづきの 盆 へ ○いその 磯 へ ○さの 坂
 の 石 へ ○いはの 上 へ ○その 其 へ ○をの 岑 へ ○あふみの 近江
 海 み ○ 龍 づつ 馬 の 馬 ま ○ 黒 くら 馬 ま ○ 駒 こ 上 ま 以上於の音此自

省 カ とる例なり。

上件の例ども古書は其證多くあれどもわづらわく
 くことぐく舉げいづれも此は准へて知べしさて右よ
 いへる如く音 オト をと ウヘ 上をへ オキ 思をもふと云る類ハことよ
 多くあれども言頭よて省けることハ一ツもあること
 譬 ハ 古事記よ出とる人名の下氷 シタ 氷 フツ 夫 カミ 霞 ト 夫 ト を下氷
 赤 カ とよ阿の言を語の中よて省けることハあれど言
 の頭よて畧ける格なれば阿の言を省きてハ語をな
 るがごとし み れ連言の阿行の餘韻よ含みて自省あり
 とるなり志あるをこれ理を辨へて此等をバ心ま
 のせよ省きて云ことよ意得て言の頭よあるをも省き

て。多とへば。思乍叙來とあるをも。モ。ヒ。ッ。ゾ。ク。ル。思始
 者とあるをも。モ。ヒ。ソ。メ。タ。レ。バ。と訓るとぐひあるハ。い
 とむくか。とら。いと。きわ。ざる。り。け。り。右。よ。引。ら。る。他。よ
 も。淺。文。忍。白。水。郎。有。綾。荒。牛。石。足。跡。負。生。浦。穴。合。家。市。内。太
 殖。相。祖。余。蘆。馬。海。績。入。面。飯。上。置。饗。會。油。餘。磐。稻。な。ど。の。類。
 古書。の。地。名。人。名。其。餘。の。借。字。等。よ。用。ひ。と。る。も。皆。同。例。よ
 意。得。べ。し。大の中跡ハもとよりトなるべく。太ハ後よ。いふ
ベ。この故。よ。出。淺。邑。厚。鹿。文。進。鹿。文。布。忍。入。姫。命。韓。白。水。郎。
ハ。タ。エ。カ。ハ。リ。ヒ。メ。ワ。カ。ヤ。ヒ。メ。ノ。サ。ラ。ラ。ラ。勝。牛。大。石。荒。足。山。跡。菟。名。
負。丹。生。松。浦。大。穴。坂。合。高。家。高。市。大。内。穴。太。麻。殖。卜。相。玉。祖。

磐余高蘆有馬碧海麻績直入河面大飯井上玉置登饗川
 會田油津媛田餘長道磐奇稻田などやうよ。連言の下よ
 のみ用ひて。言頭よ用とる例をさくま。但し和名抄よ。
 阿波國の郷名よ。殖粟惠久利伊豫國の郷名よ。味酒萬左
 介とあるハ疑むし。殖味を言頭よ用る例をければなり。
 故考ふるよ。これハ殖粟ハ字惠久利。味酒ハ字萬左介と
 唱へけむを。後よ訛りて字を省きて呼るなるべし。かの
 上總國の馬來田も元ハ正しく字麻具多と唱へて。後
 よ訛りて字を省きて呼ると全同例なるを思へし。古事
 記書紀用明天皇御子よ。殖粟皇子と申をあり。これハウ。

エ。ク。リ。と。そ。稱。ま。る。る。べ。き。神名のとけみちを古
の。い。ハ。御。の。餘。韻。は。含。ま。り。て。自。省。る。例。な。れ。バ。雷。を。か。つ。
ち。は。借。用。と。る。よ。て。か。の。阿。行。の。言。の。自。省。る。格。な。り。と。あ。り。
ど。を。書。紀。は。武。甕。雷。ま。と。香。來。雷。山。雷。な。
と。ツ。チ。と。云。は。雷。字。を。用。と。る。ハ。疑。を。し。

非畧 言の頭中尾よかゝらば省き去とるよ似て畧ける
よ非るを今姑非畧と云其證左よ舉るごとし。

韻よよらむして言の頭の自省ととるよ似とる例
連語よよりて言れ頭の自省ととるごとくきこゆる例を
此よ舉るとへば初よ出せる弥をやと云類ハ前よ舉る阿
行の音ハ餘韻によりて自省る例よあらねバ一トヨリよ
考るときハ餘韻によらばして省る例ありとおもをる

ことなれどあらざるが如し。

○弥をやと云る例あり。やへ やしほ やあびまどの
類なり。弥重 弥入 弥度

○主をいと云る例あり。みやド とド あるド むら
いなどの類なり。按よ奴之と云ハもと之大人の約ととる
より切 又 ウ の 言をなととるもれなるをやくぬ。いと云る
れて集中などよもあふぬしともぬしのだのどともよめ
てきて奴之と云ハ清音なることいちしるきをみやド等
のハ濁音なるを思へバもとより別なる言よもあらむ
らざらば此よあづららぬことなり。

上、件の例ども、言を畧きところよ似されども、やと云ふ、弥
なることをもとより具せたる言よして、ことさらよ心
として畧きところよあらば、いづれ連語のうへよ、上代
より語を成すものへと一つ格なれば、ひろく他の例よ
ほどこして云べきよ非ず、はて又跡をどののみ云ハ上
よ云り如く、山跡などのときハ、かの連語によりて、あ
言の自省あり例とおもむることなれど、書紀よ、迹驚
岡迹見、驛家集中よ、跡見庄など見え、又婚合をることを
登都具と云ふ、迹續の意ときこそえとまば、あとのあ、の言
の省、よとるものよあらで、あ、と、云ハ、あハ、足、ど、ハ、跡

夫、二言を合せていへるものなるべく思えり、あり、
然するときは、此ハ、あ、の言れ省せたる言とを云べあら
ば、又磯城磯長とあるハ、これも石のい、を省きとるよ
ハ、非、む、磯磯等を、もとより、と云るハ、故、る、り、誤、つ、べ、あ
ら、ば、又書紀よ、日向襲之、高千穂、峯、又世襲足媛、又熊襲、又
葛城襲津彦などあるを思へば、襲のお、を省きとるよハ
あらで、もとより襲を、と云、と、なるべし、又古事記よ、
湯坐書紀雄畧天皇、卷よ、湯人此云史衛などある、坐を、
と云ハ、常、よ、と、云、る、こ、と、も、書紀崇神天皇、卷よ、急居
此云菟岐子とありて、もとより、る、る、と、え、と、え、と、ら、く、詞、を

れむ坐まのまを省きとるよハあらざることさらあり。
 韻によらばして言の中間の自省みとるに似たる例。
 連語まもまらば餘韻まもまらば言の中間の自省みとる
 ごとくきこゆる例を此ま舉まるとんば初まは出せる柳をや
 ぎと云類ハまとりま考るときハま何とれく省る例
 ありとおもたることなれど志あらざるが如し。
 ○柳まをやまぎと云る例あり。あまをやまぎまかはまやまぎまなどの
 類なり。此まハまと夜ま那ま岐まハま矢ま之ま木まと云意より負せとる名
 なれが緩まハま矢ま之ま木まと稱ま急まいまふまときハま之まを除て直ま
 矢ま木まと云るもれまて其理あらはあり。

○神ま佐ま備まをまむまびまと云ることあり。此まハまと佐ま備まハま然ま儀
 の約まれる言まてま備まハま儀まなれば佐ま備まと云ハ二言
 を合せ云とるものなれむ畧例ま非ることハ勿ま論まあり。
 ○賜まをまふまと云る例常多し。賜まをまふま賜ま有まをまふまと
 卷ま十七ま勤ま多ま扶ま倍ま思ま四ま卷ま廿五ま弊ま者ま將ま賜ま十四ま十七ま伊
 低ま兒ま多ま婆ま里ま尔ま十八ま廿三ま已ま礼ま波ま多ま婆ま利ま奴ま廿卷ま四十ま比
 流ま波ま多ま婢ま豆まなどあり。書紀雄畧天皇卷ま凡ま河内直香賜
 と云人名ありて註ま香賜此云舸ま拖ま夫まと見えとり又土佐
 日記ま我國まハまかまる歌をなむ神代より神まもよみとび
 云ま同記定家卿本ま檝取又曰くぬさハ御心のいなねま

御船も行ぬあり。おほうれしと思ひとぶべきもの。あびまつりとべと云。平家物語。木曾が鼓判官とあひて。抑々殿を鼓判官と云。ハ。萬の人よりとれさうとあ。むられさうとあ。とそ問さうりけろとあるも。さうさうハ。賜さるるを音便よ云。よて同じ。此ハ古より多麻布とも。多夫とも。二方はいへる詞と見え。されば。更よ畧例とあづらば。まぎらはしき詞されば。此よ擧つ。
○凡をオホカおろ。の。と後よ云。ること常なり。於保呂可オホカと云。ことハ。書紀集中の假字と見えて。古言なること論なきを。又於呂可オホカといへることも集中とあれば。これも古言なり。こ

れ保ホを省きさるよ似されども。はよあらじ。下よいへる如く。大オホをおとのみも。ほとのみもいへることあれば。これももとより二方よいへりしなり。大物オホモノをおものといへるも同例なるべし。
○設マシヤをまけと云。例多也。其ハまうけのりを畧きて。まけと云。よ似されども。さらば然らば。古言と麻氣マキとも麻宇マウ氣とも云。さる例あれば。古より二方よ云。詞なり。雅證つらつら考るよ。まうけ。まけ。ハ全。同言なるよ。まけとある方なほ古きこえされば。うハ後よそへて云。なるべし。志あまるときハ。中よ畧きさるよハ。あらで。言を補へるも

のるり。然れども麻字氣と云ふことも。万葉に見えざれば。後のことよハ非むが、る言の中間等よりをそへていふこと。や、古よりありと思われて。やうやうといふ詞も。漸といふ言より。のそはりさるものなり。集中よても。漸字を。やうやうと訓べき處あるを。近き頃の古學者。やうくといふ詞を。古今集よりこの方此詞として。然訓ごとをきらひて。や、や、と訓るハ、よく考ふるよ。非なるべし。さるハ、やといふ詞ハ、もと弥といふ言を重ねて。弥と云ふなれば。再、其を重ねて。弥、弥とまでいふまどなればなり。俗よ峠字を書て。うげといふハ、奈良乃多武氣などいふ。

多武氣の音便は類れとるも此なるべけれど。これも嶺といふより。をそへていひ出く。とるよもあるべし。さて又後よ八日をやうの。賜をさうぶ夜をようさり。夜をようべ葬ををうむり。家刀自をいへ。とらう。梅干をうめぼう。小路をころぢなどいふも。右の例なり。又字音るがら。屠蘇佐官女院。女御。女官。女房。夫婦。牡丹。平愈などいふも。同ト。これよよりてなを考るよ。出雲國意字。郡も。とハ意なり。けむを。後よ字をそへて。意字と呼なせるよもあるべし。但し出雲字。郡の名のゆゑよ。しをさるせり。文よ。八東水臣津野命の。今者國引詔。而意字。社。御杖。立。而意。惠登。詔。故。云。意字。とあるを思へ。ハ。とハ。意。惠。なり。けむを。う。と。と。和。行。の。音。通。ふ。ま。よ。意。字。と。な。れ。る。も。の。と。も。思。は。れ。ど。も。あ。る。

雅言成法上卷

此ハ同言の重言とるを一言と約めとるものよして。はらよ畧例よあづららば。

○旅人をとびと云こと常なり。此もびひの同言の重言とるを一言と約めとるものなり。

○河原をかはらと云こと常なり。此も同言の重言とるを一言と約めとること上の如し。

巢野神とあるべきを神の美の言と重なり書紀に大足彦忍代
せり天皇と申すもおのり用とるを同の言と用ひとる
別天又ハこれハ國の志那都を級長津と書も同の言と用ひとる
下委云又河内國の志那都を級長津と書も同の言と用ひとる
一和抄よ武藏國の郷名よ稲直とあるをいなし。ほ上総國の
郷名長柄をな。の。播磨國の郷名穴無をいなし。ほ上総國の

郷名深川をふら。はとあ
ちなとみふ同例なり。

○款冬をふきと云も同言の重言とるを一言と約めとるもれなるべし。菱もひひの約とらむあれ考あり。

○左具久美と云る古言をさくみとも云り。これも同言の重言とるを一言と約めとるならむ。但さくみといふときハ左具美と濁るべきよ。久の清音字をのみ用とるハいある故ならむ。

上件の詞ども一々考るときハ言を畧きとるよ似されども然らばいづれもそれ條とよことりとるが如し。よくその所由を味ひて思ひあやまつことなる

れ。

韻よよらばして言の尾の自省ととるよ似とる例

連語によりて言の尾に自省ととるごとくきこゆる例を

此よ舉多とへば初よ出せる海をうと云類ハ前よ舉る阿

行の音此言の餘韻によりて自省る例よあらねば一とこ

又考るときハ餘韻によらざして省る例ありとたもは

ることれまど志あらざるが如し。

○海をうと云る例あり。うなをら海なのなと通へるよて

と書る處あるをも思ふべし。をなと海之原なり。即宇乃原

いへること古よハ多く下いなるみれおまじうな海かみ

をうな海さか潮うしはまどの類なり。

○水をみと云る例あり。みま水派と書紀水みくま水隈みとも水菰

みくさ水草みを水脈みかくれ水隠みいぶ水澁みづく水着みなと水門

みなわ水泡みなそ水底みなうら水占みなぎら水霧みなそ水灌

く垂るみ水出いづみ水出に水とつみ水まどの類なり。

○浪をなと云る例あり。なぎ浪際さ浪凝なごり浪折なをり古事記

なづ浪漬の木き同上なづ浪漬さ傍ふま神代紀ま田どの類なり。稲とも見ゆ。

○足をあと云る例あり。あ足ぐら古事記あ足なやむ足あ足

あ搔ゆひ足あ足うち占あ足の音たと足あ足を小ふ船ね足あ

どの類なり。

○弓をゆと云る例あり。ゆ弓ま弭ど弓ゆ末す末急弓ゆ末つ末あ弓ゆ末

づら 弦 ゆをらるなどの類あり。

○鳥を 弓腹 と云る例あり。 鳥獵 とあり 鳥座 とくら 鳥網 となみあど

の類なり。

○網を 網引 あと云る例あり。 網子 あと 網代 あしらるなどの

類なり。

○檝を 檝子 ろと云る例あり。 八十檝 やそゐるなどの類なり。 代神

紀 東國檝取 之地とも見ゆ。

○髪を 白髮 ろと云る例あり。 髪指 かざ 髪蔓 かづらなど

の類なり。

○書を 書人 ふと云る例あり。 筆手 ふで 筆 あり。 筆 などの類

る。

○中を 中倉 なと云る例あり。 珠敷 天皇 大津 淳 中倉 之

長峽 など 書紀に見えたり。

○枝を 枝 えと云る例あり。 料 ぼつ 枝 え 中 あつ 枝 え 下 ぶ 枝 え

ふる 古 え 枝 み 枝 づ 枝 え 五百枝 い 孫 ほ 枝 え 松 ま 枝 つ 枝 み 枝 え 杉 め 枝 ぎ 枝 め

え 枝 ぎ 枝 め 枝 え 枝 む 枝 ど 枝 云 枝 三 枝 十 枝 十 枝 十 枝 十 枝 十 枝 十 枝 十 枝 十 枝 十

と見え 三 卷 三 十 四 十 三 十 四 十 三 十 四 十 三 十 四 十 三 十 四 十 三 十 四 十 三 十 四 十 三 十 四 十 三 十 四 十

見 二 楓 毛 等 延 毛 と よ 六 卷 三 十 丁 二 楓 木 之 已 知 基 智 乃 枝 之

降 と ある を も 工 ニ シ モ フ レ ド と 訓 べ し と 云 説 ハ さ る と

と なり。

○沼をぬと云る例あり。 をぬ かくりぬなどの類なり。
 ○君をきと云る例あり。 かこけきと二柱神の御名を。
 那岐那美と申をばは下めてまべて神名よ岐とあるハ君
 よて古く吾君を阿藝と云後よ君貴あるハ父君母君まよ
 汝君あて君など云源氏物語よいぬきとあるきも同トこ
 とあり。
 ○吾をわともあとも云汝をなとも誰をさとも云此をこ
 とも彼をなとも云其をそとも云從をよともゆとも云晝
 をひとも夜をよとも云類ありこれハ言を省きとるよ似
 されどもわと云よ吾なと云よ汝なることをもとより具

とる言はてとささらはかまへて補とるよも畧きとるよ
 もあらばいづれも此定よ意得べし。
 ○長をなとも云いとねかえさり神代紀よ級長津彦命級
 長戸邊命見え和名抄よ越前國の郷名長畝奈宇祢とあり。
 ○隅をなとも云いとねほえさり出雲國風土記よ天日栖
 宮とあるを書紀よ天日隅宮と書れ舊事紀よ阿田賀田須
 命とあるを姓氏錄よハ吾田片隅命と志るせり。
 ○下をいと云いとねかえさり古事記書紀よ高倉下と
 あり。
 上件よいへることいふ。 海をうと云る 例より以下。 言を畧きとるよ

似されども。うと云ふ海。みと云ふ水。なることをもとよ
り具せたる言より。ことさらよ心として畧きとるよ
のあらば。いづれ連語のうへよ。上代より語を成との
命へ。とる一格なれば。ひろく他の例よ。ほどこして云べき
言よ。非は文書。おもとよりの古言よ。あらば。文の字音を直
りて呼ぶこと。さらなり。きて。て。漢字の。の韻を。ハ
省きを。つること。例多々。れば。書人。書手。など。いふとき。ハ
例の。を。除き。とること。文字を。ハ。といふ。よ。同。が。け。き
む。ふ。む。ひと。ふ。む。で。なる。ど。い。ふ。ハ。か。へ。て。宜。し。ら。ず。さ
られ。ば。此。の。其。理。あら。は。なり。さて。右。よ。い。へ。る。ごと。く。枝。々

え。だ。なる。を。連。語。よ。ハ。え。との。み。云。る。よ。連。語。を。な。れ。き。て
も。な。ほ。え。と。い。へ。る。よ。て。考。れ。ハ。此。ハ。え。と。い。ひ。だ。と。い。ふ
二。言。の。連。合。て。一。よ。な。れ。る。よ。も。あ。ら。む。い。づ。れ。具。よ。云。て
も。省。き。て。云。て。も。其。物。其。事。なる。こと。よ。も。と。よ。り。さ。ご。ま
り。あ。る。よ。て。後。よ。畧。け。る。よ。ハ。非。を。さ。て。又。大。を。ね。との。み
云。る。こと。も。見。え。ほ。との。み。云。る。こと。も。あ。り。と。見。え。と。れ
ハ。或。ハ。下。を。省。き。て。ね。と。い。ひ。或。ハ。上。を。省。き。て。ほ。と。云。る
如。く。よ。も。き。こ。ゆ。れ。ど。も。こ。れ。も。と。ね。と。云。ほ。と。云。二。言
を。一。よ。連。合。せ。て。い。ひ。始。と。る。なる。べ。し。この。故。よ。ね。ハ。大。
かし。こ。け。れ。ど。古。事。記。の。意。畧。祁。王。を。書。紀。よ。意。計。と。あ。ほ。
る。こ。れ。なり。又。大。身。大。人。など。云。と。き。ね。と。の。み。い。へ。り。ほ。

た太^ホト秀^ホ鷹^ホなど云^ホはと同^ホ言^ホふもあ^ホらむさ^ホてその^ホもと^ホ三^ホ
廿^ホ四^ホ丁^ホは^ホの^ホ太^ホ逆^ホ趣^ホ賣^ホ十九^ホ廿^ホ六^ホ丁^ホは^ホ太^ホ要^ホ盛^ホ而^ホま^ホど^ホあ^ホ
る^ホも^ホね^ホほ^ホの^ホ太^ホ省^ホき^ホて^ホは^ホの^ホ假^ホ字^ホは^ホ用^ホひ^ホと^ホる^ホよ^ホハ^ホあ^ホ
皇^ホの^ホ古^ホ事^ホ記^ホよ^ホの^ホ御^ホ太^ホ之^ホ御^ホ前^ホ又^ホ穴^ホ太^ホ部^ホか^ホこ^ホけ^ホき^ホど^ホ繼^ホ體^ホ天^ホ
皇^ホ卷^ホよ^ホ迹^ホ太^ホ川^ホな^ホど^ホあ^ホる^ホ類^ホも^ホ太^ホよ^ホて^ホ大^ホ太^ホなる^ホべ^ホく^ホ思^ホを^ホ
を^ホほ^ホと^ホ云^ホる^ホが^ホ所^ホ以^ホなる^ホべ^ホ類^ホも^ホ太^ホよ^ホて^ホ大^ホ太^ホなる^ホべ^ホく^ホ思^ホを^ホ
る^ホら^ホり^ホそ^ホも^ホ今^ホ世^ホの^ホ人^ホの^ホ心^ホよ^ホて^ホい^ホは^ホ海^ホよ^ホる^ホ水^ホ
よ^ホみ^ホな^ホぎ^ホら^ホふ^ホと^ホ云^ホら^ホと^ホ云^ホべ^ホき^ホこ^ホ
と^ホい^ホせ^ホむ^ホら^ホさ^ホれ^ホど^ホ然^ホら^ホい^ホ雨^ホよ^ホあ^ホな^ホぎ^ホら^ホふ^ホと^ホ云^ホべ^ホき^ホこ^ホ
も^ホと^ホ言^ホを^ホ畧^ホき^ホと^ホ其^ホ物^ホなる^ホこと^ホを^ホ素^ホ語^ホを^ホ成^ホり^ホて^ホ長^ホ
く^ホも^ホ短^ホく^ホも^ホ云^ホて^ホ其^ホ物^ホなる^ホこと^ホを^ホ連^ホせ^ホし^ホと^ホ定^ホまり^ホと^ホる^ホ
こ^ホと^ホの^ホ他^ホよ^ホみ^ホど^ホり^ホ借^ホ字^ホと^ホ用^ホひ^ホ十^ホ二^ホ支^ホの^ホ卯^ホを^ホう^ホと^ホ云^ホる^ホを^ホ
し^ホ又^ホ菟^ホ字^ホを^ホか^ホの^ホ借^ホ字^ホと^ホ用^ホひ^ホ十^ホ二^ホ支^ホの^ホ卯^ホを^ホう^ホと^ホ云^ホる^ホを^ホ
思^ホへ^ホば^ホ又^ホ後^ホ字^ホを^ホか^ホの^ホ借^ホ字^ホと^ホ用^ホひ^ホ十^ホ二^ホ支^ホの^ホ卯^ホを^ホう^ホと^ホ云^ホる^ホを^ホ
ハ^ホ非^ホじ^ホ又^ホ後^ホ字^ホを^ホか^ホの^ホ借^ホ字^ホと^ホ用^ホひ^ホ十^ホ二^ホ支^ホの^ホ卯^ホを^ホう^ホと^ホ云^ホる^ホを^ホ
ら^ホむ^ホ後^ホよ^ホり^ホ省^ホき^ホと^ホ云^ホふ^ホハ^ホ非^ホじ^ホ又^ホ後^ホ字^ホを^ホか^ホの^ホ借^ホ字^ホと^ホ用^ホひ^ホ十^ホ二^ホ支^ホの^ホ卯^ホを^ホう^ホと^ホ云^ホる^ホを^ホ

韻よよらばして言の頭或ハ尾の自省^カであるよ似と
連語よよらばに餘韻よよらば言比頭或ハ尾の自省^カで
ところごとくきこゆる一の例を此に舉るとへば初は出せ
る鹿をよと云類ハ一^カと^カりよ考るときハ多^カ何となく
省る例ありとおもえることなれど志あらざるが如し
○鹿をよとのみ云ハ志ハ夫の意ハ鹿^カよてカと二言を
一よ合せて云るされバあとのみ云こと省きとるよハ何
らざること勿論なり
○道をちとの云ハみハ御^ミの意ちハ路^チよてこれもと

二言を一ッよ合せて云るなれば、省きところよハあらば、この故よ、神代紀よ、可^ウ怜^{マシ}御路^チとも見えとり。

○門^{カド}をど、のみ云ハ、カハ金^{カネ}の切^キど、ハ門^{カド}よて、これもと

二言を一ッよ合せて云るなれば、省きところよ非^ヒ、門^{カド}ハ水^{ミヅ}門

海^{ウミ}門^{カド}などの門^{カド}よ同^トト、これらハ古^コ學^{ガク}者^{シャ}ハよく辨^ハへると

り、又^{マタ}四^シ云^ク、門^{カド}ハ古^コ假^カ字^ジ書^カハ加^カ度^ドと見^ミえて、度^ドを濁^ヌれること

論^ロなし、かなと、いふ時^{トキ}ハ、カハ清^ス音^{オン}字^ジのみ用^{ヨウ}ひて、其^{ソノ}證^{テイ}古

事^{コト}記^キ書^カ紀^キ集^{シツ}中^{チュウ}ハ明^{メイ}なり、さハ金^{カネ}門^{カド}の義^ギと、カハ金^{カネ}戸^コ門^{カド}といふも

かなどの約^{ヤク}まり、さハ金^{カネ}門^{カド}の義^ギと、カハ金^{カネ}戸^コ門^{カド}といふも

さ、れど、それハ、言^{コト}の起^キれ、る、う、へ、の、こ、と、よ、こ、を、あ、れ、實^{ジツ}ハ、如^{コト}い

こと、異^ヒな、る、は、^カ葛^{カヅラ}を、つ、ら、と、の、み、云、ハ、カ、ハ、髪^{カミ}、つ、ら、の、蔓^{ツラ}よ、て、こ、れ、も、も、と

二物を一ッよ合せて云るなれば、省きところよ非^ヒず。

○岡^{ツツミ}をを、この云^クの、を、ハ、丘^{ツツミ}、の、カ、處^カよ、て、こ、れ、も、も、と、二、言

を一ッよ合せて云るなれば、省きところよ非^ヒず、丘^{ツツミ}ハ、頓^{トビ}丘^{ツツミ}、處^カハ

奥^{オウ}處^カの類^{ルイ}なり、此^{コノ}ハ、氣^キの、子^コ、ま、箱^{ハコ}、去^サ、て、云、る、ハ、常^{トコ}なる、こと、上

上^{ウヘ}件^{ケン}みれ、二言を一ッよ連^{レン}合^{ゴウ}せて云ること、その條^{ジョウ}よ、こ

と、と、れ、る、が、如^{コト}、思^{オモ}誤^アる、を、ら、ら、ば、

言^{コト}の尾^ビの活^{カク}用^{ヨウ}語^ゴを除去^{トク}て云る例^{レイ}。

連^{レン}語^ゴよ、か、ら、ら、び、て、言^{コト}の尾^ビハ、活^{カク}用^{ヨウ}語^ゴを除去^{トク}て云ると

が、省^カ、す、と、る、こ、と、く、よ、き、こ、ゆ、る、例^{レイ}を、此^{コノ}ハ、舉^{キョウ}、ふ、と、ハ、初^{ハジメ}よ

出^デ、せ、る、如^{コト}、を、こ、と、云^ク、類^{ルイ}ハ、一^{ヒト}、と、り、よ、考^{カウ}、る、と、き、ハ、言^{コト}を、畧^{リョク}

ける例なりとたもえり、ことなれど志あらざるが如し。
 ○如をごとく云ハ、ごときごとくごとくけむると活用きて
 云言なれば下のきくけハ活動ハタラクをに付云言よてごとハ主
 きくけハ客なれば、それ客を除去て云ことハ常なり、され
 ば此ハ言をことさら又畧きとるよあらざること勿論なり。
 ○渡をわたと云ハ、わとらむわとりわとるわとれると活
 用きて云言なれば尾のトを除去て云こと常なること上
 の如し、合サテ云とてハ、言ちとると非ず、ハ、動ハ、
 ○廬をいほと云ハ、いほりいほるなど活用きて云言なれば
 むりを除きること上の如し、言ちとると非ず、ハ、動ハ、

○宣賜をのさまふと云ハ、のらむありありのれなど活用
 言なれば、りを除去ること上の如し、言ちとると非ず、ハ、動ハ、
 ○戯業をとはわぎ、戯言をとはことと云ハ、とはるとはれ
 ると活用言なれば、れを除去ること上の如し、言ちとると非ず、ハ、動ハ、
 ○薬玉をくまごまると云ハ、薬ハくまりくをるなど活用言
 なれば、りを除去ること上の如し、言ちとると非ず、ハ、動ハ、
 ○齋垣をいづき、齋杖をいくひと云ハ、齋ハいみいむなど
 活用言なれば、みを除去ること上の如し、言ちとると非ず、ハ、動ハ、
 ○下居をたろを急と云ハ、オロシスニ廿卷廿六下、美布、下ハたろさ
 むねろし、たろはたろせると活用言なれば、しを除去ること

と上の如し。

○作田をつく。と云ハつくらむつくりつくりつくりと活用言なればり。を除去ること上の如し。

○井光をひろ。と云ハひろらむひろりひろるひろれると活用言なればり。を除去ること上の如し。

○賜物をとまもの。と云ハ賜ハとまむとまひとまふとまへ。或ハとまらむとまらりとまらるとまられると活用言なればり。共ニ除去て云るなり。

○上件の詞の條々云ることどもを考試て言の活用言を除去て云る格を意得べし。容易くこゝろをて言を

畧けるものなりと思ふべし。此を以て思へむ。祝詞は手長之御世と云るハ足長の御世と云ことなるを。さりのりを省きて云るなりと云る説ハその理あることなり。足心とらむとらむとれらど活用言なればり。を除去ること。上云る例どもよられひとればなり。さて又神名のまさるを正勝とかゆるも勝のつハ活用言よて。如のく。よ同ト理なればり。よ用とるなり。又天探女と云も。探のる。ハ活用言よて。これも如のく。よ同トければ除とるなり。古事記。産巢日神書紀。彦湯産隅命とある。産のる。ハ活用言よて。これも如のく。よ同トけ

きば。除てむと云ふ用ひさるあり。但しこれハ共ムス。ス。をス。の一言ヲ約めて。又祝園イハと云も祝のりハ本ハ活用言ふるべければ除さること理あり。又屯島郡イハシマと云も屯のむを除さるまで同ト。此等の類猶多し。准知べし。志あるを此理を志らばして椿ツバキハ五百津葉木ツバキの謂なるを五百を省きて津葉木と云なりと云る如きハさらよあさらぬことあり。五百ハ言の主なればいので畧きていふべき理のあらむ。五百津葉木の説。本居氏古事記傳。見。え。と。り。そ。も。本居氏ハ。よ。ろ。づ。よ。い。さ。り。ふ。う。り。ぐ。れ。ハ。生。涯。の。事。ヲ。考。へ。い。さ。ら。に。い。て。止。ぬ。べ。き。人。ノ。ハ。あ。ら。が。め。る。を。く。さ。し。の。理。ハ。心。を。用。ひ。て。こ。の。下。を。ち。深。く。考。へ。い。さ。ら。に。い。て。な。不。舊。慣。の。の。ぞ。こ。ら。を。も。て。多。く。古。言。を。解。こ。と。と。り。て。な。不。舊。慣。の。の。ぞ。こ。ら。

ざりしハをいさきことなり。あをれ余グこの書を見せさ
らましむが悔て改むることのおほらむとぞ思ふ。
これらの理を志らばして。雅言を解むとあまふる故。
理も法もむをむきて。いとつとあきこと多しと志る
べし。○古事記應神天皇條。白檮上とありハ畧きとる。又。古。事。記。應。神。天。皇。條。白。檮。上。と。あ。り。ハ。畧。き。と。る。
のなる謂るらむ又書紀神代卷ハ奇御戸とありハ奇を
とひよ省きてか。の借字ヲ用とるハ非トありハ奇を
ク。又用とるその所由ハ未考得む。又用明天皇卷ハ堅塩
磯。飲。明。天。皇。卷。ハ。堅。塩。磯。此。云。峽。掘。志。と。あ。る。を。思。へ。ハ。の。
海。を。う。と。云。ハ。同。ト。云。ハ。塩。を。い。と。の。み。云。る。こ。と。も。あ。り。
未詳らむ。又神代卷ハ田心姫命とありハ東語ハ心
を許さ里といへる其ハ古言よてその許さ里を
約れハ許里とるをもて借字よせるものあり。
又一の例
○あひなむくれなむこえなむむぎなむちりなむふりな

むあひよしくれよしくえよしくぎよしくりみしくりよ
 しあひぬろくれぬろこえぬろをぎぬろちりぬろふりぬ
 ろ此等のなむふしぬろよ去字を書る處多し。逢去年散去
ヤリ書これらも前よ云とる阿行の言此自省る例よて
類なり去字をなよぬよ用とるなり志あるよこの去字をかける
 よつきてなむはいなむの畧ふしはいふしの畧ぬろはい
 ぬろの畧なりと註者等の常云ことなまど甚誤なり。イニキト
字のうへよこそ省きとる由ハあるなれ言のうへよ省
きとる意ハさらよなし多とへバをぎよしハ過去の畧
ちりみしハ散去の畧と云てもなきこゆるごとく
れどもあひなむハ逢去の畧あひぬろハ逢去の畧と
ハ云べらざらざるがごとくをて古言よ明ならぬハ明よき
固とる心をもて古書を解むとをる故よかへハ明よき

こゆるが如くなれどもかさへハ不明なると違えぬこと
 多しよ古言を心得とらむよハさることなしいづく
 まありても貫徹してそりこのなぬハ已成のぬのをと
 きこえざるよなし。このなぬハ已成のぬのをと
 らきとるよて鳥も來鳴ぬなどいふぬの活動とるものあ
 り。これらのぬハ俗言よ多と云よあさけり鳥も來鳴ぬと
云ハ來鳴と或ハ裳裾濕ぬと云ハ濕と或ハ朝も叶ひぬ
と云ハ叶とと云ことなるよていよく去ハいぬの畧なら
ぬこととをさとるべし多とへバ朝も叶ひぬと云ハ朝も叶
て水門よ満ちとへとと云ことなるよを満ち
へ去とと云てハさらよ叶ひがときが如し

○い彌よ○うつ○志ぬよ○志ほよ
丁よ蘇豆毛志保尔奈
伎志曾母波由とあり
○はら
麻乎夫祢波良尔宇伎互とあり
○志み
○

雅言成法上卷

とを、撓み靡くさ ○あわ、上より同、多和とのみ云ることあり、多和ひくくと重ね云とる
ことをまをいふ ○ゆら、玉聲、など云類あり
和を畧きところはあらば

此等ハ言を畧きとるハあらで、ねむころと云て事足る
か如き處を、ねむころごとと古言云ること多し。下のこ
ろの言ハ調を助け文なして云るものあり。そのごろ同
じ理よい。よいのようつのつハ、そへ云て文なしとるあ
るべし。又まにくといふ詞ハ、まよとのみ云とる事も多
けきバ、そのまにを重ね云とることハ論なし。志あるよ三
言よいひてよろしき處を、まにまと云ることあり。それも
下のまにのにを畧とるよハあらで、まにまといふまの言

をそへて、調を助け文なしとるものなるべし。茅草刈婆可チガヤカリバカ
爾ニと云て事足る處を、茅草刈草刈婆可爾チガヤカリカニと云。百千鳥者雖モ、チドリハクレ
來ドと云て事足る處を、百千鳥千鳥者雖來モ、チドリチドリハクレと云て、下の草千カヤチ
鳥ドリちといふ詞をそへて、調を助け文なしとるも似とるこ
とあり。月夜よ十夜よ、東屋のまやちどよめるも、右の歌
どもよ本づきてよめるものなりと、ねをゆ、さてつらつら
とわとわ、ゆらゆら、ちども云とる。其ハ重ね言とること
つなきを、なかつら、とわ、ゆら、と云ときハ、下の疊言
をそへとる語なるべく、ねをえとり、つらつら、のつ、とわと
わ、の、と、ゆら、ゆら、の、ゆ、を畧ときとるよハあらで、又思ふよ、つ

ら。も。古事記仁徳天皇大御歌。袁夫泥都羅。玖とある
 を思へば。もとより都羅。といふ言ありて。其を活用して。
 都羅。伎都羅。玖など云はら。ハ。神代紀。楚散とあり
 て。註。此云俱穢。選。箇須とあるを思へば。もとより波
 羅。といふ言ありて。其を活用して。波羅。伎波羅。久波
 羅。加須など云るものとねわゆ。然るるとき。これらつ
 ら。は。ら。ハ。つ。ら。つ。ら。の。つ。は。ら。は。ら。の。は。を。畧。き。と。る。も
 の。よ。も。ら。を。そ。へ。さ。る。も。の。よ。も。あ。ら。な。い。よ。う。つ。な
 ど。ハ。い。よ。い。よ。の。下。の。い。を。省。き。り。つ。り。つ。の。下。の。う。を。省。き
 と。る。も。の。よ。も。あ。ら。む。其。時。ハ。上。云。と。る。阿。行。の。言。の

自省。る。例。む。に。よ。く。叶。ふ。と。さ。り。ち。と。さ。り。の。財。麻。袋。に
 訛畧。後。は。言。便。は。類。れ。訛。り。畧。り。と。る。言。を。今。姑。訛。畧。と。云。其
 證。左。に。舉。る。と。と。し。の。類。例。を。云。ふ。と。さ。り。の。財。麻。袋。に
 未。言。の。頭。の。省。で。さ。る。例。を。云。ふ。と。さ。り。の。財。麻。袋。に
 連。語。は。か。き。を。ら。ば。て。言。の。頭。に。省。で。と。る。例。を。此。に。舉。
 〇馬。を。ま。と。云。る。事。あり。ま。せ。ま。ま。き。ま。ま。く。さ。る。と。の。類。か
 〇ま。せ。も。古。ハ。う。ま。せ。と。云。し。る。り。ま。せ。と。云。ハ。後。は。訛。り。て。
 う。の。畧。り。と。る。あり。故。集。中。は。宇。麻。勢。と。あり。清。少。納。言。の
 枕。冊。子。は。ま。せ。と。見。え。と。れ。バ。彼。頃。ハ。既。く。訛。畧。き。て。呼。る。な
 〇ま。き。と。云。も。後。は。訛。り。て。う。ま。き。の。う。の。畧。り。と。る。なり。

和名抄よ、牧無万岐とある。字を無とせらば、はや、後とあれど、
なを彼頃までハ畧きてハ呼ざりなり。まくさと云う。
まくさの訛畧あり。和名抄よ、秣和名萬久佐とあれバ、彼頃
ハをやく訛れるなるべし。古御馬草と云うハよし。御馬を
みまと云ハ、阿行の音此通て、言の自省る例よ、協ひされ
バなり。假畧の標中を考見べし。上總國の馬來田也。古ハ
○未をまどと云う事あり。万葉よりあれど、伊麻陀と云う
こと數志らばあれど、麻陀と云うことハ、つむなり。古今
よりこゝろハ、未といふべきをまどと云うことこれあれ
あれバ、此も後よ訛りて、いの畧ありとるなり。但、麻多之

伎といふ詞ハ、集中よもあれど、其ハ未いきのいを畧きと
るものよ、ハ非、清音の字を書るよても、別言あるを知べ
し。混ふことなあれ、そもくまど、ときまど、きまどといふハ、待
意よりいひさる詞ときこえとるをや。意よりいひさる詞ときこえとるをや。
○出羽を今世ではと云ハ、訛ていの畧ありとること、いふ
までもなり。出居をて、出船をて、ふねといふなど、同じ
これらハ後とて、もろるを、しきものハ見えとること、あ
し。
言の中間よて省、とる例
連語よより、或ハ志あらば、して、言の中間よて省、とる

例を此に擧

○庭をばと云る事あり。引ゆむ かのば 馬庭うまばなどの

類なり。此等みれば後訛にて。にの畧也とるにて。古ハ弓場。

獵場馬場或ハ大庭神場稻場などいづれも正しく爾波と

呼しなり。古今集詞書ハ馬場をうまばとあるハ。彼頃ハ既

を獵場の借字なりと云る説ハ甚非なり。彼ハ鴈路の馬誤

なるべきよし余が委考あり。書紀にも獵場とあるをばか

訓とハと本居氏説ハ。凡某場と云場を婆と云ハ。後世の言

よて正しき古言ハなまきことなり。其ハもと某爾波と云

爾を音便ニと云ふ。又其ニを省けるも此なり。凡て音

便のニの下ハ清音をもみな濁る例にて。ハを濁るるを後

又ニを省きてもなま其濁の残れるものなりと云る如

志和名抄ハ相模國但馬國等の郷名。美作國の郡名。大庭を

ある無波ハ爾波の訛なり。後つひよこの無を省きて

て波とのみいへるハニとび音便ニ類れとるものなり。

○人をとと云ることあり。あづまど。これなり。此も右

同トク。後の音便ハあづまんどと云さるを。凡某人を某

商人をあきん。ど。旅人を多びん。ど。など云。和名抄ハ丹波國

郷名の川人加波無土備中國の郷名の間人万無土などあ

るを思へ。ハこの音便。又其んを省きてあづまど云るよ

んを省きてもなまんをそへるときの濁を残してあづ

まど。ハどを濁りて唱るるべし。されバこれ正しくハ

阿豆麻比等といふべきなり。和名抄大須本ハ阿豆末豆今

豆末無豆とありしを無字を後脱せるを又ハ其頃ハ省
 きて唱へしもあるべし。豆と云るハ藏人を後又ぐらう
 づと云ふ同じくこれ訛なり。さていふはまればあづまん
 どあづまとおづまづまど云ハ後の訛にて古の正しき称
 やハあらに袖中抄又載る歌ハ後の訛にて古の正しき称
 づまづまおなとあるも後なれば證とあるはあむらひ
 ○吉野國栖を昔よりくむと呼來れども十卷十六又國栖
 等之春菜將採とあるを舊訓コクニスラガとあるこれ正
 しき唱よて古ハ凡て久爾瀆といへりなるべし。古事記
 をはしめその他の古書よも皆國字を作るを思ふよくむ
 と云ハ後音便ノ類れ畧りしとることある也。但し集中ハ
 處あれハ國をくといひしこともあるなり。隠國と書る
 ふ人もあるべし。彼ハ其地の形勢を思ひて故ノ義を得て
 國字を書るるハ他の直ハ其地の借字を用ひ
 とるるをねハ他の證ハなりがし。

○泊瀬をばせと中昔より云ハこれ後訛て畧けるな
 り。古ノ浪速を奈爾波と訛りしと同格なるべし。
 ○糧をかて五卷和名抄ノ可利豆ノとあるを。と云も後訛て畧け
 ることばせの例ノひとり。音更ハ
 ○拜をを烏書紀推古天皇ノ卷ノといふも後訛て呂
 の畧リとするなり。同
 ○所思をねほ於母保ヲ要ヲをおおおえと云も同トことなり。
 毛べと云もこれも後訛て畧リとするなり。
 ○見麻久欲行麻久欲と云をみます。いふままほい。万葉
 以これらノ麻久ヲをまと云も後訛て畧リすること上
 いへることをべてるし。

雅言成法上卷

の例も同ト。

○鶏冠木をかへでのき。万葉に蝦手とも。可敷流氏ともあり。モミツッ

るを昔よりモミツッルカ。テと訓來れる甚なり。モミツッ

比留提乃抄とある。色立成を引て。加と云も。後と訛て。留の畧

ととること上も同ト。

○土師をはくと云も。土を例の音便よはんと云なり。つひ

よそのんを畧きとるなり。さて音便よはんとと師を濁て

唱へしをんを畧きても例の如くなほその濁れ残れろよ

て。これも訛なり。爾來り。同ト。前津君をまつき。和名抄に。太政大臣於保万豆利

古止乃於保万豆利

ま。あ。き。み。天智天皇紀。太政大臣等あり。顯宗天皇紀。多

く。伊。万。宇。智。岐。美。古。今。集。よ。堀。川。の。大。い。ま。う。ち。き。み。な。ど。云。後。は。訛。で。へ。の。畧。あ

る。ハ。つ。を。う。い。ふ。の。み。ら。な。ど。云。後。は。訛。で。へ。の。畧。あ

る。ハ。つ。を。う。い。ふ。の。み。ら。な。ど。云。後。は。訛。で。へ。の。畧。あ

る。ハ。つ。を。う。い。ふ。の。み。ら。な。ど。云。後。は。訛。で。へ。の。畧。あ

る。ハ。つ。を。う。い。ふ。の。み。ら。な。ど。云。後。は。訛。で。へ。の。畧。あ

る。ハ。つ。を。う。い。ふ。の。み。ら。な。ど。云。後。は。訛。で。へ。の。畧。あ

る。ハ。つ。を。う。い。ふ。の。み。ら。な。ど。云。後。は。訛。で。へ。の。畧。あ

る。ハ。つ。を。う。い。ふ。の。み。ら。な。ど。云。後。は。訛。で。へ。の。畧。あ

けむものよあらむをべて官府にてハ語路の便なる
 を主として煩をしきをいとへりしと思へるハことあれ
 なる類も故後ハ太政大臣を省きて大い大臣とい
 へる類もあり又定考をかうちやう稱唯をいせうといふ
 類ありて當昔の定より似て畧きて唱来しことと思へる
 由ありて當昔の定より似て畧きて唱来しことと思へる
 一ハなりての例天皇の御事
 ○東をひかんと云も元ハむをとりよ唱へしを後の音
 便よひんおしと云ふし又其の後に訛りて畧するあり
 さてかの某場の例のごとく凡て音便のんの下ハ濁る
 事よてを濁れるを又んを畧きても猶その濁の残れる
 ものよてを正しくハ清て唱しあり和名抄ハ攝津國
 郡名よ比年我志奈里とあるハいまごろをハ省るざりし

ろどもそや彼頃ハ牟を鼻よかけてんと唱けむあら我
 と濁りなるべし
 ○陸をくろと云も後ハ奴の訛り畧するものならむ但久
 奴賀といふものなる假字書ハななれど古言なるべし
 ○絆をほし十六世一丁ハ保太志と見ゆと云も後ハ訛
 て毛を畧き布を保よ轉せるものなり
 ○冠をかむりと云も後ハかうぶりと云る和名抄ハ加字
 を又るをんよ轉してかんぶりと云又つひよんを省て
 かぶりと云とるるりさて音便の濁を残して夫といひと
 るそれ夫を牟よ通をしとるよてかぶりの訛なり

◎被カニをかカふると云も上カは准カべし。

◎鍛カチ冶チをかカちと云も後カは訛カして奴カの畧カしてカらカるべし。

ちを濁カるもカとより訛カらることカ志カるし。

上カ件カは云カる例カども考カ合カせて後カは訛カして自然カ省カあり

と云は此郷名ハ野ノ多カき地カなれハ大津カと見え今カも大津カと呼カぶ

と切カきと又カ土佐カ國カの郷カ名カなれハ大津カと見え今カも大津カと呼カぶ

と尋カべり又カ土佐カ國カの郷カ名カなれハ大津カと見え今カも大津カと呼カぶ

と云カこも又カ土佐カ國カの郷カ名カなれハ大津カと見え今カも大津カと呼カぶ

と云カこも又カ土佐カ國カの郷カ名カなれハ大津カと見え今カも大津カと呼カぶ

と云カこも又カ土佐カ國カの郷カ名カなれハ大津カと見え今カも大津カと呼カぶ

と云カこも又カ土佐カ國カの郷カ名カなれハ大津カと見え今カも大津カと呼カぶ

と云カこも又カ土佐カ國カの郷カ名カなれハ大津カと見え今カも大津カと呼カぶ

と云カこも又カ土佐カ國カの郷カ名カなれハ大津カと見え今カも大津カと呼カぶ

と云カこも又カ土佐カ國カの郷カ名カなれハ大津カと見え今カも大津カと呼カぶ

津野カと唱カへ大角カと字カは書カけむを野カを省カきてもな元

乃カとあるハかかけりハ柄カ深カ川の例カならむ右カの餘カ集中カハ早

敷カ通カ速カ為カるハ思カはるハ切カハ約カめハ約カめハ約カめハ約カめ

乃カとあるハ思カはるハ切カハ約カめハ約カめハ約カめハ約カめ

乃カとあるハ思カはるハ切カハ約カめハ約カめハ約カめハ約カめ

乃カとあるハ思カはるハ切カハ約カめハ約カめハ約カめハ約カめ

乃カとあるハ思カはるハ切カハ約カめハ約カめハ約カめハ約カめ

乃カとあるハ思カはるハ切カハ約カめハ約カめハ約カめハ約カめ

乃カとあるハ思カはるハ切カハ約カめハ約カめハ約カめハ約カめ

乃カとあるハ思カはるハ切カハ約カめハ約カめハ約カめハ約カめ

乃カとあるハ思カはるハ切カハ約カめハ約カめハ約カめハ約カめ

乃カとあるハ思カはるハ切カハ約カめハ約カめハ約カめハ約カめ

相通音韻の親通によりて彼カも此カも互カは通カえして云

を今カ姑カ相通カと云其カ證カ左カは舉カる如カし

音を通をして云とる例

○こひしきこほしき戀とつきとどき便り附なをのを如
 そきへそくへ至極はふはほ延うつせみうつそみ現身
 がてりがてら帯て物たきいき息とあくもりどのくも
 り陰り合よしぬえしぬ吉野古事記ありさねかづらさなか
 づら五味なぶちなめて長道はしきよしはしきや愛む
 ほどろはどれ離るをこりこ愚なることいきゆき壹岐名
 ゆく行並やあぢ古事記いきとみ石上かもづくしまかど
 ね神名いさのかみいそのかみ石上かもづくしまかど
 く鴨着島わいどを櫓み靡くさま木東き木東け木東を歌

氣と云ること殊多し私記一兒古事記及日本新抄並
 云謂易子之一木乎古者謂木為介故今云神今食者古謂之
 神今木矣云々とあり景行天皇紀は御木木此云開と見え
 近江の佐木村を和名抄は條節とありこれら使と氣と通
 あり例など云る類ハ古の音通なり但し其中はよしぬをえ
 しぬと云るなむ又下きは古云ることよしもあらむ又ひ
 びふひろふ拾ふさくふせく塞かねかみ蟹あめのかぶや
 あめのかぶや夫名くねこのね金くにのまほろくよの
 まほろ國之中央うむろしたむの心は叶ひてをけらう
 けら木わ行をさぎうさぎ鬼同をのくわな懼をわ
 通るど云類ハ古の音通よしあるべく又いさゝの古きと
 後なるとによりていひさまのかをれるもあるべし猶よ

く考へて物をべきことなり。此、餘之をな。通して。まな
ひ目交うなをら海原ぬなと瓊音みなぎは水際みなと水
門みるそこ水底みなうら水占みなきらふ水露合みれそ
そく水濯うなかみ海上うなさか海界などハ多くいひさ
れどあまのそら天之原かはのせ河之瀬などいふ之をな
と通をして云ることハさらぬなり。されバ音通へむとて
心まらせよハ云ることハなるなり。がくさあはよ音
通よも差異あることよて。といハとりよたこめて音
通ハ通へが同音ぞと意得て。容易く古言を解こととるに
よりて。誤ること常多し。こ色ハ音通の道世は行えれて縦

横自在よとりまあるふよよりてなり。いでたどろか
云む七卷廿五丁ハ西市爾但獨出而眼不並賈師絹之商自許
里鴨十二丁ハ我背子之將來跡語之夜者過去思咲ハ更
思許理來目八面などある思許理を頻なり。と先輩等の説
ハ解也。きろころ伐などいへるも。もと音通なるべく。まこ
とよ志ころ志きろハ音の似通ひとる故。頻なりと云む
ハさることなれど。右の歌ども頻る意として。目ならべば
買とり絹の商頻るもと云てハ。いある義とも聞とり
がく。又更頻來めやもと云も。頻來むことハもとより
あるべらねバ。さハ云までもなきこと。本句よかへて

よく考べし。この思許里ハ俗ニ志そこまひといふ意なり。
七卷なるハ西市ニ唯獨出て目並べに一人目利して買得
たりし絹をばしめハ美物なりと思ひし。今よく見れば
然らば商の失計にてある哉との謂なり。十二なるハ男の
必來むと期すも夜さへも來ぬりて徒に過ぬるあらハま
して然らぬ夜ハ來べきニあらざれむ。今更待とて過り
て來そこまひも來らむや。縦や今ハさてありなむと
假に縦べしと義にてよくきたえたり。源氏物語若紫ニ志
すはらあしつる時ありて侍るを。とくこそ心見させ給
ため。梁塵秘抄口傳集ニ左衛門督通季。たこりごちよわ

づらひて。志そこまひてありけるよ云ふ。などある志
こらみ流も志そこまひよ。て同言なり。さてその志あ
いひ始しもとの義ハいあはまれ。つみひとるうへの意を
考ふべしと云ハ。このことなり。又うつと云とをつと
云とハ。お行の音通よ。て同言ときさるるが故。故學す
る徒。誰もそれ差別あることを辨む。て現字などを書る
處の必。ウツ。とよむべきをも。ウツ。とよめることある
ハ。いとわろそらなり。古の假字書の例證を熟考るよ。四卷
五下。打乍ニ波更毛不得言夢谷妹之手本乎纏宿常思見
者。五卷下。宇豆都仁波安布余志勿奈子奴波多麻能用流

能伊昧仁越都伎提美延許曾十七丁廿二宿夜於知受伊米
 爾波見礼登宇都追爾之多太爾安良祢婆云なるど猶多
 れどかくさまの處ハみれ宇都追とのみ云て乎都追と云
 ころハちららよるし五卷十三久志美多伊麻能遠都豆
 爾多布カ伎呂可儻十七丁廿四伊爾之敝欲伊麻乃乎都頭爾云など見え
 爾云々又丁廿二伊爾之敝欲伊麻乃乎都頭爾云など見え
 てかくさまの處ハみら乎都追とのみ云て宇都追と云
 るハさらよる元來夢と對へて現前カッきうへのことよ
 ふよハ宇都追といひ古と對て今現カッのことよいふよハ乎
 都追といひていさゝあその差異あることなるを言ひ

さゝ可かえれるのみよて親く通ひ事もかえり多
 るのみよて大と似とるよよりて後世ハ古學徒も
 そを辨へ別とざることハねえとれど古人ハ言を精嚴
 よしてかむありのことよも粗忽オロソカなることハなり
 上件又云る例ども准へて古の普通のさまをさと
 ていさゝ清雜ミヤリらざりしことを思ふべし
 韻を通をして云ころ例
 ○いさゝいさゝ出雲地名神代紀よ五十狭之小いさ
 きいさ頂にほどりみほどり鷗鷓古事記あり美ちぎひ

ぎ内宮外宮の屋わとりであとりぜ渡處につらふにつ
 根は建る木。のにの蓑尔乃と云こおやトおなトを
 丹色のみのにのと字鏡に見ゆ。おやトおなトを
 映る形。のにのと字鏡に見ゆ。おやトおなトを
 め大坐をふとしとふとしきとも云ハ。知と敷と
 韻通ひて言ハ似とれども。理二方なれば。同言ハあら
 阿伊と佐之と殊は親く韻を通えし云とる例
 ○雨をさめと云ることあり。春雨。小雨。氷雨。などの類みれ
 あをさといへ。稲を志ねと云ることあり。孝昭天皇御名
 を觀松彦香殖稻天皇。又十握稻千稻八百稻和稻荒稻など
 の類なり。稲を志ねと云例とい別なり。切ハ石を志ね
 と云ることあり。堅石これなり。これみないを志ねといへ
 かく阿伊と佐之と親く通えし云ること多きを餘の字延

於と須勢曾と。かくさまに通えし云ることのなきハ。い
 なる故ならむ。但とまハ通し云とりとおかゆることな
 きよハあらねど。其も常の韻通のさまよて。右よいひと
 るとハ様異れり。そのさま通し云とりと云ハ。うつさつ
 棄宇都と云ることハ。古言多。須都と云も古言なり。五
 卷廿八丁よ。須都良牟十九廿六丁よ。須底氏など見えたり。
 えせ兄たもかゆたもえゆ。所思廿卷廿四丁よ。阿之可伎能
 互毛志保ハ。奈伎志曾母波由とあるハ。於毛保由を東語
 人なくして。曾を語辭と意得とるハ。深く考へざりし故
 たり。本居氏詞の玉緒よ。此歌をてよをば多。かへる歌の中
 よいれて。上よそとあれ。バゆると結ふべきを。かと結ひと
 るハ。もも。とらで。のそ。はと。のせり。元來於を曾と
 いへることよ。心つるで。にを。はと。のせり。元來於を曾と
 いとほ。いなきことなり。東歌も。さま。で。を。はと。のせり。元來於を曾と

る歌ハなきを自、おろそろよ見をぐしなど云るこれなり。
て、古歌ハ難つくろこそいとほしけれ。など云るこれなり。
那行の言と多行左行の濁音と韻を相通として云と
る例

○わなくわづく 縊 かなーかづー 金作 あかはなあかはだ
劔名 いなさいださ 出雲地名古事記、伊那佐之小濱とあ
十田狭之小 古事記 書紀 五、十、狭、之、小、濱、と、あ
深とも見ゆ わをらよ わをらよ 素羅珥とあり。和 あらよあ
らよ 不有、天智天皇紀、うきままりうきままり 浮渚神代紀
一、羽、企、阿、羅、珥、と、あり、書紀、古事記、
記、よ、も、宇、岐、士、摩、理、と、あり、書、
と、讀、ひ、の、こと、なり、爾、ハ、漢、音、ジ、る、れ、バ、ウ、キ、ジ、の、假、字、よ、用、と
る、なり、と、云、り、こ、れ、中、に、よ、る、し、ジ、と、も、ニ、と、も、と、よ、り
通、り、云、い、な、さ、い、ざ、地、名、上、り、云、る、ら、う、の、さ、ち、い、ひ、こ
る、なり、云、い、な、さ、い、ざ、地、名、上、り、云、る、ら、う、の、さ、ち、い、ひ、こ

麻行の言と波行の濁音と韻を相通として云とる例

○とこむらとこぶら 腕 かなーむかなーぶ 悲 なまるなむ
る 隠 書紀 古事記 地名 あまどむあまとぶ 天飛 かむるき
かぶるき 神皇祖 云、い、か、む、る、き、

上件よ云る例どもは准へて、古の韻通、并那行を多行左
行の濁音よ、麻行を波行の濁音よ通云、ることを知べし。
右の例の中まもいさ、る古きと後なるとよよりて、い
ひざまのかをれるもあるべし。猶よく考へて物をべき
ことなり。時を志な、暫を志ばしと云類も、那行を多行の
濁音よ、麻行を波行の濁音よ韻ハ通ハしとれども、通よ

よりて、後よ訛_マとるものなれむうけたりとる相通の
例といひひがとけき_バ此_レ等ハ下の訛通の標中よ出
つ母を_{オモ}飲悶_{オボ}と云るハ麻行と波行の濁音と韻通ふ例よ
ていと親くきこゆるをなほ訛也と書紀よ志るされと
るよてうけたりて相通ふ言なりといひて止べうらぬ
をも志り且_タ古人の言を精_{オゴ}嚴_{ソウ}よせし_カとをもさとるべ
しな_カ下よ委_ク云倍_シ。

訛通 音韻の通によりて訛_マとるを今姑訛通と云其證左
の擧る如く_ハ音韻によりて訛_マとる例_ハ諸_ハ語_ハ音_ハ韻_ハと云らる

まよまゆ 眉 いめゆめ 夢夜行 うをいを 魚 をぐむむご
くむ 育羽裏 ほびころはびころ 廣く延 まそかづみまをか
がみ 青銅鏡 むぐらもぐら 梓 ああときあろつき 曉 あぢさ
るあづさる 紫陽花 あるくありく 行歩 かくむかこむ 圍さ
もらふさむらふ 侍 かぞへかぞへ 計數 とわやめとをやめ
女を愛て云 祈をきおをき 草名 とぶてつぶて 磔 はろぐ
祢和行通音 はろぐ 遙かそけきかそけき 幽ぬの野 志ぬ志の 小竹
志ぬ志のぐ 凌 志ぬぶ志のぶ 忍 とぬしこのし 樂 まをん
まうん 申和行 など云類な多し いづれも上ハ古の雅此
みれ音ハ通へどもその通よよりて後よ訛_マとるものな

上件云る例どもをよく考へて、古の雅言と、後の訛言とを辨へて、混亂ミダレべからば、

音通よりなるら、活用ハタラカを辭イキの俗イキしくされる例

○うるうるええるえ得得ささづくづくるるささづづけるける授授ううををるるううせるせる失失めめづ

るるめめででるる愛愛かかささぬぬるるかかささねねるる重重多多ふふるる多多くくへへるる湛湛そ

むむるるそそめめるる滌滌みみゆゆるるみみええるる見見みみごごるるみみごごれれるる乱乱うう

るるりり急急るる飢飢又又ななどど云云類類多多くくいいづづれれもも上上ハハ古古のの雅雅言言ののいい

りりままるる以上以上五十五十音音のの第第三三位位のの字字韻韻よよてて云云ここととをを第第四四位位のの

衣衣韻韻よよ通通いいししととるるなりなりおおくくるるおおききるる起起ややををみみすするるややをを

上

んんぐぐるる安安おおつつるるおおちちるる落落志志ふふるる志志ひひるる強強ううららむむるるううらら
みみるる恨恨くくゆゆるるくくいいるる悔悔ななどど云云類類多多くく上上よよ以上以上第第三三位位のの
字字韻韻よよてて云云ここととをを第第二二位位のの伊伊韻韻よよ通通いいししととるるなりなり
上上件件のの例例どどももはは准准へへてて古古のの雅雅言言よよははととららのの一一云云とと。
今今世世のの俗俗言言よよ活活用用一一云云るるややううととのの差差異異をを辨辨べべしし但但しし
古古言言よよととままくくいいささつつるる泣泣といいふふべべききををいいささちちるるといい
ひひああららぶぶるる荒荒振振といいふふべべききををああららびびるるとと云云るるこことともも見見
ええととれれどどももここれれハハ古古よよりりのの例例よよててななべべててのの證證よよハハなな
ままつつととししささてて又又古古言言よよ第第四四位位のの衣衣韻韻よよててそそめめるるみみごご
れれるるななどどいいふふハハ雅雅言言ののそそむむるるをを俗俗言言よよそそめめるる雅雅言言のの

行の言は訛るところなり。せびせみ蟬なども。せび古くてせ
み。後ら。又ハいなびいなみの例。古より二方よいへる。
詳さらば。

上件の例どもを考へて。那行麻行の言ハ。多行波行の濁
音ハ親く通ふことなれど。容易く韻通へバ。同音なりと
思ひ委ユダシて止べきよあらば。其故ハ。書紀神武天皇卷。時
人因號其地曰母木邑。今云。飲悶オホノ延奇キト訛也。云々。時人仍號
鷄邑。今云。鳥見是訛也。とある。これ所謂麻行の言と波
行の濁音と。これとあると親く通ふことなれど。母を悶
ま。毘を美。訛也と志るされとるよて。古人の言語を精オホ

嚴ソカよせしかと思ふべし。今世の人の心あらば。多オホく通
言あると云て止ぬべし。そもく。な。ぬ。ね。の。と。だ。ぢ。づ。で。
ど。と。ま。み。む。め。も。と。ば。び。ぶ。べ。ぼ。と。ま。ことよ親く通ふこ
とよて。彼レも此レも通をレ云る古例多をれば。そをこ
とレく分ツ差チてきをやあレ物せむハ。むつレのレく行過ト
る事なりと思ふ人もあるべし。げよかのいなみいなび
地名 あど。古より二のといひなれとること多々れば。
さても止べきことなれど。あレハ寧樂朝以往のてぶ
りよまらひて。古言をならべつレとらむ歌文よをめ
ろきと云べきをレべらき。志レまレと云べきを志レむレと

云とらむよ。その作主の心もちひのわどさへ見え
られて。甚くつきまきものなり。これいふよとなれば。後
の訛をもちて。古の雅言の間よまドへとるなれば。古
りとらむ人の耳よハ。いみづく耳立おゆゑなり。

轉換 必然るべき語勢によりて。言を轉換ていふを。今姑

轉換と云。其證左よ舉るごとく。言を轉換ていふを。今姑

言の活用くさまによりて。音を轉換て云はる例

○立居の如き。立ハあちつて。居ハらりる。此とをくらきて。
あちむあちあちつて。をらむをりををれ。行思の如きハ。
行ハかきくけ。思ハはひふへとはとらきて。ゆゑむゆきゆ

く切々おむむおむひおむふおむへなど云類。みれその
活用くさまによりて。言を轉換て云はる例
げ見をむめと云て。ころむめ。めをなご云類あり。寝を
なねと云て。なをねむなど云類あり。此等同し理あり。
自餘い准て知べし。

連語によりて五音の下位を上位に轉換て云はる例

○天をあまと云ことあり。あまのちらあまくも。上をうは
と云ことあり。うはへうはつく。酒をさうと云ことあり。
さのつきさのつが竹をさうと云ことあり。さのとりと
むな。船をふなと云ことあり。ふなのりふなきほひ。胸をむ

ろるどの類なり。以上第二位を第三位に轉しとるるなり。又
 木をこと云ことあり。このはこのみ。火をほと云ことあり。
 ほなるほのほ。荷をのと云ことあり。のさきのとりと。黄泉
 をよもと云ことあり。よもつくに。よもつ志こめ。居ををと
 云ことあり。をりをる。乾をほと云ことあり。ほしほを來を
 こと云ことあり。こよとぬなど云類なり。以上第二位を第
 五位に轉しとるるなり。
 清濁轉換 濁音を清音に轉し換とる。古の二は音便を。今姑
 清濁轉換と云。其證左に擧る如し。云はるる。云はるる。云はるる
 連合せとる便によりて。下の濁るべき言を清て。上の

濁るまどき言を濁りとる例

○里人を散度人。穂觸之峯を久士布流多氣大鉤を淤煩鉤
 など云る類なり。里の穂の。大のほは必濁るまどき言
 なるを。下のひふち。に連ね合せとる便により。必濁るべき
 を清て。その濁音を上よりつしとる。いとめづらし。

連合せとる便によりて。上を濁りとるによりて。下の

濁るべき言を清りる例

○日陰を比賀氣流。夜降を夜具多知馬手繰行而を馬太伎
 由吉互。伊小箭手插を伊乎佐太波佐美など云る類なり。書
 紀神代卷。大葉刈とありて。訓註に刈此云我里と見えと

れバ。大葉^{オホハ}我^ガ里^リと我^ガを濁^テて唱^ケけむを。古事記^ニ大量^{オホバカリ}とあるハ。我^ガの濁音^ヲを上^ニ轉^シて。大婆^{オホバ}可里^{カリ}と唱^ケたるべし。

○上^ノ件^ノの例^{トモ}古^ノの^一のいひさまとおちえと^リ。意得^レたきて古書^ヲを讀^ムべし。疑^ハべあらば。

去^リ重^シ合^サらる^野力^ナり^ル土^ヲ濁^リも^リ力^ナり^ル下^ノの^音を濁^スる^音を土^ノと^シて^ハ濁^ル音^ナり^ル也^ナり^ト思^フべし。○埋^メ入^ル音^ノは^ハ濁^ル音^ナり^ル也^ナり^ト思^フべし。○埋^メ入^ル音^ノは^ハ濁^ル音^ナり^ル也^ナり^ト思^フべし。○埋^メ入^ル音^ノは^ハ濁^ル音^ナり^ル也^ナり^ト思^フべし。

